

東京五輪が始まりましたが、新型コロナウイルスへの感染拡大が止まりません。日本ではワクチン接種による重症化抑制効果が出ているものの、デルタ株と呼ばれる変異ウイルスへの感染者が急増し、経済の再開や回復への重荷となり予断を許さない状況が続いています。コロナ感染による死者数はすでに日本で1万5千人を超え、世界全体では400万人を突破。これほど多くの死者が出れば、コロナ禍は地球環境問題と同じように「人類への脅威」と捉えるのが妥当でしょう。

たとえば新型コロナウイルスは変異しますが、「変異する」ということは生きているからです。自然界の生態的環境は生物（人類を含む動植物）と非生物（大気、土、水、光）に大きく分けられ、ウイルスは細菌より小さな微生物という生物に分類されるからこそ変異するわけです。そもそも売買や生産・消費などの経済活動を行うのは人類だけですが、この目に見えないウイルスという微生物によって人類特有の経済活動が脅かされている現状を考えると、収束が見通せない現在のコロナ禍において「経済を読む」観点からは、生態系（エコシステム）を考慮しなければなりません。つまり、バブル経済崩壊やリーマン・ショックなどの経済危機は人類が創造した経済・金融システムの破綻に起因していました。ところがコロナ禍による経済の停滞には地球環境の視点を取り入れなければならないわけです。なお、こうした地球環境問題の詳細は、中央経済社



HIROFUMI TANGE

## ハンタースクールに 高まる期待へ②

丹下博文氏

一九五〇年、愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了。米コンビニア大学経営大学院修士(MBA)、同大学院客員研究員。UCLA(米カリフォルニア大学ロサンゼルス校)経営大学院および社会公共政策大学院客員研究員。愛知学院大学教授を経て現在は企業経営総合研究所代表、博士(経営学)。主著に「企業経営の社会性研究」を含む企業経営研究三部作(中央経済社刊)など多数。環境経営学会から学会賞(学術貢献賞)、日本物流学会から学会賞(著書)を受賞。

刊『地球環境辞典』を是非ご参照ください。

さて、本年3～6月に国立科学博物館(東京・上野公園)において「大地のハンター展」が開催され好評を得たようです。この場合のハンター展は、野生動物の世界における弱肉強食や食物連鎖に基づくハンティングが主要テーマ。しかし自然界でハンターの頂点に立つのが人類である点は疑う余地がありません。ちなみに、かつて欧州でハンティング(狩猟)はキング・オブ・スポーツ(スポーツの王様)と称され、日本には「マタギ」と呼ばれる専門のハンター(狩猟者)がいました。今日の日本ではハンターの減少や高齢化によって害獣の捕獲・駆除に支障をきたしています。加えて同じような就業者の減少や高齢化に直面している農林水産業に従事しようとする傾向、さらに昨今のアウトドア志向や社会貢献志向などの動向を鑑みると、今後、ハンターへの関心が高まると予想されるのです。

こうしてジュラテクノロジー株式会社(本社は北海道広尾郡大樹町)が運営するハンタースクール『森のハンター教習所』に対する期待が高まるわけです。また、同社設立の母体となったキャリオ技研株式会社(本社管理本部は名古屋ルーセントタワー39階、富田茂社長)はドローン(小型無人機)や「空飛ぶ車」の研究開発に取り組んでおり、とくにドローンを使った次世代型の狩猟技術が大変興味深く、経済への波及効果も注目されます。(続く)